

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第4回講座概要

第1部:歩いて考える 五合目 小富士の魅力

座学「富士山」とは

■日時：平成30年10月14日（日）9時15分～9時45分

■場所：須走口五合目 山小屋 東富士山荘 2階

■講師：米山 千晴 東富士山荘 代表



■巡拝の道とは何か概要説明

■第1回・第2回・第3回講座概要の振りかえり

■講義概要

1. 富士山の基礎知識

- ―富士山は標高 3776m。頂上の年間を通して平均気温は -6°C 。夏でも 5°C 。半そで、半ズボンで登ることは、大変危険である。
- ―頂上の空気濃度は平地の70% (2/3)、5合目では83%。標高0mで1気圧1039hpaが100%であり、5合目は870hpa、山頂は630hpa。小山町役場で1005hpa。5合目でも気圧が低いので、手足のしびれや呼吸しづらいなど高山病の初期症状が出ることがある。今年のインドネシアの台風は917hpa。最近の台風は920hpa程度で温暖化が進んでいる。上昇気流により7～10mの高潮が押し寄せる。
- ―水が沸騰するのは、平地(1気圧)では 100°C 。5合目は 91°C 、山頂は 81°C 。頂上で煮炊きをするのは困難。山小屋では、高压釜で調理し、食事を供給している。

2. 富士山の生い立ち

- ―日本はユーラシアプレート、北アメリカプレート、フィリピン海プレートの3つのプレートがぶつかりあっている。北米プレートで3.11の地震が起き、東南海地震も想定されている、相模トラフには神縄断層がある。
- ―富士山は度重なる噴火によってできた山である。
 - 900万年前(島が本州にぶつかり伊豆半島ができた頃)：富士山がある所はまだ海
 - 50万年前：駿河湾形成。「小御岳」という山が出来た。富士スバルライン、今でも残っている古御

嶽神社の一角

○10 万年前：富士市が形成されている。「古富士」ができた。箱根・愛鷹山が火山活動を休止。箱根の火口が陥没し、カルデラに川の水が入り、芦ノ湖ができた

○1 万年前：本格的な富士山の形成。新富士火山で大量の溶岩が流れ、斜度 37 度になった。「小御岳」と「古富士」を埋め尽くしてできた。三島溶岩流は、直線距離 20 km、曲線距離 42 km

○5000 年前：度重なる噴火によって、グランドキャニオンができた。地層 90m の火山堆積物

ー富士山は三層構造。新富士火山の溶岩は、安山岩的で柔らかい。古富士火山の溶岩は、厚く固い溶岩

3. 富士山の湧水について

ー富士山の底面積は約 930 km²。そこに降る雨や雪は年間 20 億トンと言われている。湧水量の 1 位は三島地区、2 位が富士宮地区、3 位が富士地区、4 位が山梨県。柿田川では 1 日の湧水量が 120 万トン、このうち 18 万トンは上水道に、11 万トンは工業用水に使われている。沼津市、熱海、横浜にも送られている。富士地区の 1 日の湧水量は 114 万トン。ニジマスの養殖にも使われている。珍しい特産品に芝川のりがある。富士地区では、製紙業が盛んで、製紙 1 トンを作るのに富士山の湧水 500 トン使うといわれている。この地区では、地下水が 1 日 127 万トンあるのに対して、113 万トンを採取している。小山町、御殿場市は地下水の流動量は 114 万トンで、そのうち 28 万 4 千トンが井戸から揚水されている。富士山は巨大なスポンジ状の水がめとなっている。

4. 富士山須走口登山道と浅間神社の創建

ー須走口は古代より、官道の東海道から分岐して、籠坂峠を経て、加古駅、河口駅を通り、甲斐国府へ抜ける官道の途中にある。

ーこのような交通の拠点に、富士山の噴火を鎮め、交通の安全を祈るために浅間神社が祀られた。1259 年には登山道と記されたという記述もある

ー登山道の 7 合目の沿道からは、富士山への奉納物としては現存最古の事例である懸物が出土している。

ー「勝山記」では 1500 年の条には須走口登山道に道者が集中したとの記事が見られる

ー1633 年にそれまでの駿河徳川氏の支配から、小田原藩稲葉氏の支配に代わり、1646 年検地施工され、須走村には田が無く、畑地のみ、屋敷数は 62 軒のみであった。

ー須走は標高 800m の高原に位置し、稲作が出来なかったので農耕以外の生業を持つことによって成り立ってきた

ー古来より富士講をはじめとする富士登山関係者の受け入れの地として、御厨地方と甲州の交易拠点として要衝の地であった。また、木材の伐採搬出などの山仕事が必要な産業であった

ー1686 年の古文書によると、家数は 57 軒、内訳は名主 2 軒、神主 1 軒、山伏 1 軒、酒屋 1 軒、座頭 1 軒…人数は 399 人。富士登山の宿場集落及び交通の要衝の地

ー富士講が隆盛を迎える 1700 年代に入ると、須走の御師は 16 名、御師宿は盛況で、16 の客間、計 210 畳の畳の上に最高 350 人泊めた。2 ヶ月で 1 年分を稼ぐと言われた

ー富士参詣の導者は、須走村入り口(1 本けやきが見付)で銭 16 文の入山料を召し上げられ、浅間神社では奉納金 12 文納めて登山道に入った

ーその後大日堂(馬返しの上の大日堂)で、(現在は狩休の下)、役行者堂に着く(御室浅間神社の下)→浅間神社中宮(御室浅間神社)と小屋 2 軒があり、金剛杖が売られていた。古御岳観音(古御嶽神社)→や砂ふるい(砂走の終点)→や石室と呼ばれる 3 軒の小屋、その上に姥子という場所(現在の本 6 合目あたり)2 軒の小屋→鎌岩、4 軒の小屋→小渡り(現 7 合目、見晴館)に 1 軒→なめ岩小屋 4 軒(下江戸屋のすぐ下)→行合(現本 8 合目)

ー9 合目は「御橋」と呼ばれ 6 文の奉納金が義務付けられていた(現：迎久須志神社)

ー山頂まで役銭(入山料)16 文、奉納金 26 文を納める。現在のお金で約 18 万～19 万円になる。個人では登れないので、「講」という組織を作り、お金を出し合って登った。富士講の起源である。

ー昭和 39 年のスバルライン開通、44 年の富士山スカイライン開通までは賑わっていたが、開通以降、須走口の下山者数は激減した

5. 質問

Q. 須走口、富士吉田口どちらが古いか？

A. 現在、富士吉田が一番古いとされている。1164 年に登ったという記述がある。しかし、須走口は宝永の噴火で古文書が紛失し、分らない。日蓮上人などがこの地を通り、2400m 付近から出た石碑を見ると須走口から登ったと思われる。

第2部:体験編「歩いてみよう！五合目・小富士」

■日時：平成 30 年 10 月 14 日（日）9 時 55 分～12 時 00 分

■場所：須走口五合目、小富士

■講師：米山 千晴 東富士山荘 代表

ー今年、馬返し付近でスラッシュ雪崩が起きた。3 月には中腹 2600m 位では雪が降るのだが当時は雪と雨が混じっていた。富士山のこの辺りの斜度は 24 度で地表が凍っており、その上を雪崩が起きた。2150m 辺りでは凍っていなかった。そこからスタートし、大溪谷というが、広大な斜面の先が狭まった。幅が約 9m 弱位の溪谷。だらだら流れていたものが、急速に速くなり、時速 170 km でグランドキャニオンに向かっていき、大量の土砂を押し流した。演習場に 40 万 m³の土砂が流出、馬返し付近には約 20 万 m³の土砂が流出した。



ー昔は、堰堤の後ろを掘り、次の災害に備えたが、今は法律で土砂が取れないので堆積した土砂の上をまた土砂が流れていく、ということになる。

ーダケカンバの花の終わった後の実。ナナカマド実が落ちた。大きい円形の葉＝オオカメの木、別名虫狩（むしかり）という。

ー富士山の場合、5～10 月の 6 ヶ月で春夏秋の 3 シーズンがやってくる。それ以外は冬である。

ーマットが敷いてあるのは、特定外来生物が入らないように。ここでしっかり泥などを落として入る

ーシラビソの木。モミの木の仲間。材質が柔らかい。常緑を付けていて、風が吹くと折れやすい。原生林に入るとオオシラビソが多い。樹高は 20m 位の巨木、これは 170 年



その2

―宝永噴火時には焼失しているので、混交樹林。200年から230年位のカラマツの木。カラマツは固い木で折れにくい。

―古御嶽神社付近、廃仏毀釈ですべて首が無い仏像があった。

―植生が変わっている所。昭和34年にブルドーザーなど大型機械が入り、2400mまで道路を作ろうとした。長田山荘まで登山道を上げるという計画があったが、この上が岩盤なので今のような機械が無く、しばらくの間ここを5合目とした。当時は3合5勺のちに4合5勺。昭和34年以降も植生が変わったまま残っている。林の中を一度切ると日が入る。日が入ると先駆植物の木が生える。ナナカマド、ミヤマハンノキ。その次に、モミの木、シラビソの木。シラビソはたくさんの種を蒔いて子孫を増やそうという木。1万本種が落ちてでも残るのは1%



―先駆植物。ナナカマド、ダケカンバ、カラマツ。そののちに生えてくるのがモミの木。モミの木が世代交代をしている。

―馬返し付近から始まる落葉広葉樹、この辺りの針葉樹。富士山は樹種が多いので日本でもまれに見るきのこの種類の多いところである。

―腐葉土に菌をはびこらせるチャナメツメタケ。なめこ系のきのこ。

―溪谷に古富士溶岩が見える。これが出ると洗掘される。むき出しにより流速がますます増し、堆積されたものが流れる、を繰り返し溪谷が広がっていく。放っておくと広がるが、自然公園法で手を加えられない。瞬間的に3m位の高さまで土石流が上がったことが分かる。



―宝永の噴火の溶岩・玄武岩、その上が柔らかい石がのっているのが分かる。

―木に付いた苔みたいなもの。屋久島では長いが、富士山では気温が低いので、なかなか長くなれない。これが付くと木の水分を取られるので、木は枯れてくる。



その3

ー古御嶽神社の社有地。人工構築物がある。これがい
わゆる富士山信仰の修験者が行をしたところ。8年前
に小山町で調査をしたところ、室町時代の茶碗が出
た。その後文化庁に発掘調査の依頼をしたが、自然公
園ということで許可が下りない。崩れ始めているので
早急な調査が必要である。ここが一番上で、高僧が行
をしたと思われる。その下に階段があり、5段階に分
かれている。出土したのが一番下の段だったので、茶
を沸かしたり接待したのではないか。長さ 150m、幅
40m の大きな行場



ーこちらの山とこちらの山が違う。沢の向こうからここが 100 年前に焼失した森。陽樹林、陰樹林、先
駆植物、モミの木純林がある。度重なる雪崩で新しい森になった
ー古富士火山の一部。小富士の火口は溶岩棚の下。古富士の上に乗っている小富士は 817 年に噴火。864
年にできたのが青木ヶ原樹海。その前に古富士が創生されている
ー山中湖登山道
ー陰樹林が形成されると苔むす。地表に水蒸気を放出するのを防ぐため

ー陰樹林＝極相林。本来ならコメツガ、シラビソの純
林であるべきだが、最近の気候変動で木が倒れる。
木が倒れているが、原因がある。「凍裂」という。
シラビソは柔らかく水分の多い木。加工がしやすい。
冬のこの気温は-25 度以下になる。夜中に-25
度以下になると水分が凍る。夜中にすごい音で裂け
る。裂けることによって水が入り、中にウロが出来
る。中が弱く、倒れる。常緑の木は風に弱い、頭が
重い。そこに雪がつきやすい。倒れることにより、
日が入り世代交代になる。若木が育つ。1 万本の
1 %しか育たない。林が世代交代で変わっていく。
気象状況の厳しい場所では世代交代するにも難し
い。普通の場所では極相林が続くが、富士山の場合
は、風によりまた元に戻る



ーこのカラマツは、中が腐っているが、中からナナカ
マドが育っている。養分を頂いて育っている
ーコメツガに松茸が生える
ー下が溶岩なので、下に根が張れない。根を上に出し、
直根と言ってお互い支えあう



その4

ー溶岩棚。1200 年位前の須走口の 7 合目、見晴館の横から流れ出た小石を巻き込んだ溶岩。小富士があったから止まった。何層にもなっている	
ー木々は砂気が無くても生きていける。石の割れ目に根を入れて水分を吸って生きている。自然の生命力はすごい ーシラビソのぼっくり	
ー100 年経って、ようやく先駆植物から極相林に変わりつつある。富士山は度重なる雪崩、近年の大雨により伸縮が進んでいるというものを見ていただいた	

まとめ

ー富士山は変わりつつある。25 年前は 3200m から上は永久凍土だったが、今は白山岳の下に一部と剣が峰の裏に一部しかなく、消滅している。永久凍土が無いということは、下に固い層が無い、それが雪解けを早くしており、流れ出る湧水が早くなる。富士山は病んでいると思う。地球規模で変動をどう守っていくかを考える人が増えて、その輪が広がればいいと思う。



山中湖登山道